慈光

昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和四十年十月十五日発行（毎月一回・十五日発行）

（通第一九七号）

第十七巻　第十号

目次

歎異抄第十二章講義(三)……近角常観……(1)
ルーテルと親鸞……福島政雄……(5)
連続無窮……福田鉄雄……(11)
随想その折々……柳瀬留治……(17)
愚者の信……花田正夫……(21)

歎異鈔第十二章講話（三）

近角常観

「故聖人のおゝせには、この法をば信ずる衆生もあり、そしる衆生もあるべしと、仏ときおかせたまいたることなれば、われはすでに信じたてまつる、またひとありてそしるにて仏説まことなりけりとしられそうろう、しかれば往生はいよ〳〵一定とおもいたまうべきなり。あやまてそしるひとのそうらわざらんにこそ、いかに信ずるひとはあれども、そしるひとのなきやらんとおぼえそうらいぬべけれ。かく申せばとて、かならずひとにそしられんとにはあらず、仏のかねて信謗ともにあるべきむねをしろしめして、ひとのうたがいをあらせじとときおかせたまうことを申すなりとこそそうらいしか。」

信仰の眼中には唯仏様と自分があるばかりで、他の善悪は更に無関係である。否、善悪ともに自分の信心を増長さして下さる御縁である。しかるに世間の見解では人生の事をお互の間で解決せんとするのである、それ故、研究やら、論議問答やら、諍論誹謗やらが起るのである。

しかるに一度仏を信じつる上は、如何なる誹謗や非難を向けらるるも何等の痛痒を感ぜざるのみならず、それが御縁となりてます〳〵信を増長するのである。即ち仏すでに謗法の人あることを説きたまう已上は、はたして仏説の通り事実謗法の人があるわいと益々仏語に虚妄なきこと、今更の如くまのあたり見ることが出来る、しかれば仏説の如く往生一定と益々決定すべきである。万一にも一人も謗法の人なくんば、仏かねて謗法の人ありと説きたもうに事実上その人は無きかと怪しまねばならぬ。これあだかも第九章に「これにつけてこそいよ〳〵大悲大願はたのもしく往生は決定と存じそうらえ。踊躍歓喜のこころもありいそぎ浄土へまいりたくそうらわんには煩悩の無きやらんとあやしくそうらいなまし」と仰せられると同様である。歓ぶ心の無きにつけ、いそぎ浄土へまいりたき心の無きにつけ、そしる人のあるにつけ、往生は一定と決定するのである。

かく言えばとて人に謗らるるのがよいという意味ではない、仏かねてしろしめして、煩悩具足の凡夫と仰せられしごとく、仏のかねて信謗ともにあるべき旨をしろしめして我等が疑なきように説きおきて下されたなれば、仏語に虚妄なし、本願あにあやまりあらんや、と何につけても眼につくものは本願なり、大悲なり。信仰と修養との区別は最後本願に安んずるか、人生に眼をつけるかの点である。

仏は助けて下さるは有難いが、どうも喜ばれぬとか、往生は一定に違いないが、出来るものなら論をやめたいとか、謗る者を愛せねばならぬとか、善にせよ、悪にせよ、気にかけるは、はからいである。

信仰はわが往生の一大事である、人が謗るにつけても益々仏語に虚妄なきことをまのあたり見せて貰うたというて喜ぶべきである。流罪であろうが、迫害であろうが、されば、そくばくの業をもちげる身にてありけるをたすけんと思し召し立ちける本願のかたじけなさと本願に立帰りて仰ぐのが信の力である。

かく確かなる本願にてまします已上は、謗る人自身すらも結局それが因縁となりてこの大悲のめぐみを蒙るに違いない。唯信鈔に「信謗ともに因としてみなまさに浄土に生るべし」と云い、教行信証の後序に「信順を因となし、疑謗を縁とす」と仰せられたも皆この大悲を仰がれたのである。かく言えばとて、決して人に謗られんとて企てるのではない、たとい謗る人でも空しくしたまわぬが大悲大願の御恵みである。唯々不思議というの外はない。

余事にわたるようなれど、大悲大願の御はからいを仰ぐのと自分のはからいをさしはさむと、すこしのことで、寸毫の差、千里の別を生ずる次第である。たとい親鸞の名字を悪しと思うて聖教を山野に捨つるとも、これに触るる有情、蠢々の輩、その益を得べし、と仰せられ、また出家として肉味を食すること無慚無愧の甚しきなり、せめては三世諸仏、解脱憧相の袈裟をかけながら、これを食したならば仏縁を得るならんと仰せられたは、何れも皆仏の御恵を仰がれたのである。

しかるに若しこれを誤って、虫や魚を救うためにとて事さらに色々の企てをしたならば、それこそ難行雑修である、親鸞は父母孝養のためにとて念仏一遍にだも申したることいまだ候わずと仰せられた聖人が一点自分の力をさしはさまるる筈はない。親鸞は何の価値もなきもの、若し親鸞をにくむのあまり、これを山野に捨つることありとするも本尊聖教は如来の流通物なれば、お救い下さるとお恵みを仰がれたのである。それを誤りて、ことさらに山野にすてるなどと企てたならば大間違いである。同様に若し誤て人に謗られんと待ち設けるならば大間違である。人が謗るにつ

けても仏説まことなりけりと仰ぐことを仰せられたのである。

「いまの世には学問して、ひとのそしりをやめんと、ひとえに論議問答をむねとせんとかまえられそうろうにや、学問せばいよ〳〵如来の御本意をしり、悲願の広大のむねをも存知して、いやしからん身にて往生いかゞなんどとあやぶまんひとにも、本願には善悪浄穢なきおもむきをも説き聞かせられそうらわばこそ学生の甲斐にてもそうらわめ。たま〳〵なにごころもなく、本願に相応して念仏するひとをも学問してこそなんどと云いおどさるること法の魔障なり、仏の怨敵なり、みずから他力の信心かくるのみならず、あやまて他を迷わさんとす、つつしんでおそるべし、先師の御こころにそむくことを、かねてあわれむべし、弥陀の本願にあらざることを。」

当時、余程学者風のききわけ、知りわけて論議問答をする弊があったものと見えて、実に思いきって戒められたのである。

この章に対する証文が、即ち第二章の「しかるに念仏よりほかに往生の道をも存知し、また法門等をも知りたるらんと心にくくおぼしめしておわしましてはんべらんはおおきなるあやまりなり云々」これである。故に学問は少しもいらぬ、しかし学問をしてならぬというではない、学問せばいよ〳〵如来の本願の旨をも知り、悲願の広大の旨をよくよく胸におちつけるためである。

ここに注意すべき、如来の御本意とか、悲願の広大のむねという、ことに重々しくきわだちたる御言葉を、例の如く言葉すべりをして、あたりまえのことと軽々しく読み去りてはならぬ。

第三章に「この条いったんそのいわれあるに似たれども本願他力の意趣にそむけり」と云い、

第九章に「これにつけてこそ大悲大願はたのもしく云々」なども同様である。本願の御本意は、特に五濁悪時のわれらをたすけるために起したまいたのである。悲願の広大なることは大小の聖人、軽重の悪人、みなことごとく助け給う大海である。清浄なるものを助ける願は他にもあり、善人の成仏する法は多し、しかるに汚穢極悪の我等をことにたすけんがために選択したまいし本願である。

学問せば物しりになるためではない、能くこの本願の御本意、悲願の広大なることを信知して、他の人が、我如き賤しき者、愚かなるもの、穢れたるもの、悪しきものは往生はいかがなんどとあやぶまん人に対して、本願には善悪浄穢の区別はない、むしろその汚穢下賤の凡愚を救わんと

いうが選択本願の御本意であるぞと、説き聞かしてこそ学問した甲斐もあるというものである。しかしこれは文字だけで読む学問ではない、お慈悲で心に頂いた活きた学問である。聖徳太子讃に曰く、

久遠劫よりこの世まで　あわれみましますしるしには
仏智不思議につけしめて　善悪浄穢もなかりけり。

他の法然上人の御弟子は文字で選択集を読まれたるゆえ学問的に合点せられたものゆえ、自分が貧窮困乏、愚痴無智、破戒無戒とは我身なりとは頂かれなんだ。

しかるに親鸞聖人は聖徳太子の御導きのもとに、愛欲の広海に沈み、名利の大山に迷える垢穢凡俗の愚禿一人のための御本願と頂かれた。

全体まことにこの活きた信心の外に学問があるべき筈はない。しかるに宗学なる学問が別立する様に考えらるるに至ったは大なる間違いである。信の一つが活きて居れば、本願の真意を説き聞かせ得る学問が、信が一つ無きために全く論議問答、物知りの道具となり、たま〳〵信を頂いて本願の仰せ通り、愚痴無智のままで何心なく大悲を仰いで念仏する人に対して、訳を知りて居るか、学問せねばならぬなどと言いおどすというは言語道断である。

ここに至って歎異鈔の百尺竿頭一歩を進むる筆鋒をもって「法の魔障なり、仏の怨敵なり、みずから他力の信心かくるのみならずあやまて他を迷わさんとす、謹しんでおそるべし、先師の御こころにそむくことを、かねてあわれむべし、弥陀の本願にあらざることを」といましめられた。これ求道者の学問に対する態度をお示し下された。実に現代の如き学問万能を信ずる社会に対して、剴切骨を刺す御誡めである。

かく言えばとて決して学問をしりぞけ、おろそかにせよとにはあらず、信を得るには学問も何もいらぬ、されど信を得れば学問がさまたげとなるとは云わぬ、学問せば、いよ〳〵本願の真意を明らかにせよとの仰せである。必ずしも学あるが故に邪魔とならず、学なきが故に害ともならず要は信があるか無きかである。

一代経を五遍読まれた法然上人が選択集には、三部経と道綽・善導の外に引用したまわぬ。それを授かりたまえる親鸞聖人は教行信証に一代経を縦横無尽に引用したまいた、その顕浄土真実教行信証とはこの章の初めに仰せられし如く、「他力真実のむねをあかせるもろ〳〵の聖教は、本願を信じ、念仏を申さば仏になる」ということである。念仏成仏是真宗の外はない。蓮如上人は御文に「一切の聖教というも、ただ南無阿弥陀仏の六字を信ぜしめんがためなりというこころなりとおもうべきものなり」と仰せられた。

「求道」第六巻第十一号所載。

ルーテルと親鸞

福島政雄

四、家庭生活（その一）

ルーテルも牧師として結婚生活に入り、親鸞も僧侶の姿そのままで妻帯している。西洋でも修道僧は生涯独身という誓を守るのが正しいとせられ、日本でも叡山の修行者は女犯（にょぼん）を許されないのが定めであった。もつともカトリックの僧で中世以来ひそかに妻を持った者があり、叡山の僧も坂本の遊廓に通った者が多くあったということは事実であるが、それは破戒無慚の所行であって聖者の道をふまず堕落したものである。

人間の堕落は何れの時においても食色の欲か、財産欲か権力欲かの放恣によって起るものであるから、貧と独身と絶対服従との誓において一生涯を送るという修道僧の生活にも意義はある。仏教でも梵行というのは清浄行という意味であり、その清浄というのは、主として男女の欲を禁じて童貞を保つということである。修道僧または修行者にしてこれを保ち得ないものは堕落したものとなる。

西洋でも東洋でも千年、二千年とながい間に清浄行を徹底した高僧達も多く出ているが、その徹底が出来ないで堕落した者の数はまた実に多い。而して西洋ではルーテルによって、日本では親鸞によって、このことについて一大宗教的革新をもたらされ、この点において両者は宗教的生活の改革者として相通ずるものであると云われている。まことに両者は外面的では相似たものがある。然しルーテルの結婚と親鸞の妻帯とその内心の自覚においては如何であるか。ここに両者は相通じてしかも相異るものがあると思う。

ルーテルの結婚及び結婚観は、家庭を宗教的に神聖と見るというところから出立している。それは強制的に修道女とならせられた女性に対するルーテルの理解と同情とから出立している。幼少にして修道院に入れられ、自覚の齢に達して修道女たることを欲せないようになった女性に対するルーテルの理解と同情とが一五二三年四月四日に、九人の尼を修道院から脱出せしめるという結果になったようで

ある。而してルーテルの胸中には神の御旨にかなう男女の結婚は神聖であるという信念があったのである。故にルーテルはこれらの女性の中八人を次々に結婚させた。

然るにカタリネ・フォン・ボラという脱出尼だけは容易に結婚しなかった。その理想が高かったのである。ルーテルはこれを友人に勧めたようであるが、カタリネはなかなか結婚の承諾をしなかったそうである。カタリネが最初から結婚の相手として、ルーテルを目ざしていたかどうかはわからない。併し両者の結婚が恋愛に出立したものでないことは明かである。ルーテルは四十二歳、カタリネは二十六歳の結婚であるから、そこには理知の動きが主となっていたことを推察し得る。

ルーテルは最初結婚の意志はなかった。生涯独身を神の前に誓った身として結婚すべきものではないと考えていたそれがどうしてカタリネと結婚するようになったか、その間の消息はわからない。しかし推測をほしいままにして見れば、ルーテルの結婚は宗教界革新の意図の一つのあらわれであると思われる。結婚は神聖のことであるというキリスト教本来の思想を生活の上に実現したものであると推測することが出来る。

「自分は神聖なる結婚の讃美の裡に存在し、存続し、しかして死ぬる」

というのはルーテルの言である。恋愛から出立したのではないが、結婚後のルーテルは深くケーテ（カタリネの愛称）を愛して、自分自身よりもケーテを愛すると言っている。ケーテが死ぬるならばむしろ自分が死ぬるなどとも言っている。

ケーテはよほど見識の高い夫人であったようである。子供は三人の男児と三人の女児とを生んだが、長女は幼にして死し、次女は十三歳で死んだ。ルーテルは一五二五年六月十三日に結婚式をあげ、一九四六年二月十八日に世を去ったのであるから、その結婚生活は二十一年ばかりであったのである。

ルーテルのテイツシュレーデン（卓上語）の中には、結婚に関する色々な言がある。その中でケーテに対して言っている次のような言がある。

「神の最高の恵と賜物とは、信心深く親切で神を畏敬し而して家庭的な妻を持つことである。その妻と平和に生活し、すべての財産や持物をも、身体をも生命をも妻に信頼して託し、妻と共に児を生むのである。併し神は或る人には忠告を与えず、正しい考も行もわからない前に結婚させてしまうこともある。ケーテよ、お前は信心深い夫を持ち、その夫はお前を愛している。お前は女帝である。自分は神に感謝する。しかしこれは信念深く神を

畏敬する人にのみ属することである」

これはルーテルが如何に自分の家庭を神聖視し、如何にケーテを愛し且つ敬したかを物語る言葉である。実にルーテルはその家庭生活において神に感謝をささげていると共に家庭の中の夫としての自分について十分の誇りを持っていたのである。

（昭和三十三年二月十八日）

五、家庭生活（その二）

親鸞の家庭生活の有様はまたルーテルと趣を異にするものがある。叡山における親鸞の悩みはいわゆる聖道門の生活を徹底することが出来ないという悩みであった。それは十九才の時に河内の国の磯長の太子廟に参籠したことによって察せられる。当時の叡山の僧徒の生活は、破戒無慚の生活であったが、その中にあって親鸞は真面目に修行したその修行が真面目であっただけに、内心の苦悩は痛切であった。その役目は堂僧というのがあって、それは常行堂において念仏三昧の修行をしたものである。親鸞の頃にはその一期の修行は一七日間位であったと思われるが、観念と観相との念仏の修行であって、観無量寿経に説かれてあるような順序で、仏の浄土を目の前に浮べ、心眼の前に阿弥陀仏を見るのである。この修行によって妄念を去り、心地清浄の境地に入ることを志したものであろう。しかし妄念はなか〳〵に去らなかった。そこに深刻な苦悩を感じた親鸞の心に浮んだのが聖徳太子であった。太子は俗人として妃もあり御子達もありながら仏教の信念に徹せられた人である。この太子の歩みのあとを踏んで行きたいという心が浮んで、それで磯長の太子廟参籠ということになったと思われる。

参籠の結果は如何であったか。伝説によれば、親鸞は太子から死の宣告を受けている。汝のいのちは今から十年ほどで終るというお告をきいたという。この伝説は親鸞における死の問題の自覚を物語るのであろう。想像をたくましうすれば、親鸞は数日の間断食して太子廟にこもり、廟窟の銘文を読誦し、その結果、妄念を去るには死の覚悟を要するということに思い至ったのであろう。ルーテルが大雷雨に遭うて死の問題に目ざめたのと趣は異るも、死の問題に当面した点においては相通ずるものがある。ここに親鸞は死の覚悟を以て更に叡山の修行を続けようという新なる決心のもとに帰ったのである。

山に帰って更に十年修行を続けた。それは必死の血みどろの修行であったろう。しかも妄念は去らなかった。常行堂にこもって念仏三昧に入っている間は妄念も薄らいだかも知れない。然し堂を出て雑務に向えば妄念はかえってしつこく迫って来たに相違ない。男子の青年期、青年中期、

青年末期の心の濁りは胸中に湧き立って来たであろう。定水を凝らすといえども識浪しきりに動き、心月を観ずといえども妄雲なを覆うという言葉は、正しく此の時の親鸞の心を正直に告白したものと考えても宜しいと思う。十年は経過した。親鸞の修行の道は内面的に裏切られて、さんざんに打ちのめされたのである。

建仁三年二十九才に達した親鸞は、もはや叡山の修行を思い切らねばならなかった。その正月元旦から決心を新にして京都の六角堂に百夜こもる願を起した。

六角堂は太子の御建立と伝えられ、その本尊は観世音である。親鸞はいよ〳〵太子の御足のあとを辿るという心持で百夜の参籠を始めたのである。毎夜観世音の宝前に跌坐して終夜の読経を続けたのである。その第九十五夜、すなわち四月五日の暁方、寅の刻、即ち午前四時の頃に、太子廟窟の銘文を口ずさんでいた。これは太子廟に言い伝えられている太子讃仰の偈文で、七字づつ二十句になっている太子を観世音の化身として仰ぐ心持を歌ったものである。

この偈文を口誦んでいるうちに親鸞は思わず三四分間居ねむりをした。その間に夢を見て、夢に示現をうけられてやがて法然を訪い、雑行をすてて本願に帰した。

その後親鸞三十一才の頃、六角堂の夢をみられた。その時の夢記として観世音のお告の声を聞いた。

『行者宿報設女犯、　我成玉女身被犯
一生之間能荘厳　　臨終引導生極楽』

というお告である。これは青年末期の煩悩に深刻な宿業を感じ、しかも自分が俗人となって結婚生活を行うときの我が妻は観音の化身であるという意味を有し、玉女という言葉において華厳経に述べられている家庭の理想にも触れて居り、煩悩の唯中に家庭生活の理想を感得しているのである。

ルーテルは神の恩寵によって聖化せられる家庭を建設し観鸞は観音の慈悲によって、煩悩のこの身そのままに家庭の生活に入るという。ルーテルの家庭は聖化ということに重点があり、親鸞の家庭は慈悲の導きを仰ぐということに重点がある。ルーテルは聖化の家庭に誘りをさえ感じたであろうが、親鸞は家庭の生活にいよ〳〵自身の煩悩を観じそこに仏陀の慈悲をしみじみ感ずることとなる。親鸞の結婚生活は越後流謫の後に始まると見るのが正しいであろうが、その内室、恵信尼は後に関東時代の生活において夢に夫の親鸞を観音の化身と見て深くその事を信じ、誰にもそのことを語らず、親鸞の死後にはじめてその事を末子の覚信尼に打明けている。この間の消息は実に奥ゆかしいものがあると思う。

六角堂の夢想の直後に親鸞は親しい友である聖覚法印に

よって法然の吉水の庵室に導かれ、百ケ日の間法然の許に通い、その教に徹して、専修念仏の心がひらけ、融通無碍の生活の第一歩に入る。而してその愚禿の自覚は越後時代に始まる。親鸞の家庭生活はその三十余才の時から九十才に至るまで五十余年の長きにわたるのである。

昭和三十三年三月二十日

六、政治と宗教

政治が宗教を利用したり、宗教が政治と結託したりすることは、何れも間違った行き方である。ルーテルは政治と結託したりするつもりは無かった。しかもルーテル時代のドイツと全欧とは非常な政治的混乱の有様であった。而してルーテルは人間の現実を鋭く徹底的に見て容赦のない批判を行い、鋭い言葉をもって責めたてる人であった。一五一七年の九十五箇条が戦の意味を持たなかったとしても、一五二〇年のドイツ貴族のキリスト者に告ぐる大論文においては鋭く法王を責めている。一五二五年の農民の叛乱に際しては、全力を尽して叛乱の無効なことを説き論じた。しかもその「平和の勧告」においては貴族が民の血をしぼり、庶民をして堪え得ない境地にいたらしめたことについて諸侯や貴族を鋭く激しく非難している。ルーテルほど暴言を濫発した人はないということである。心に感じたままを心の火が燃えているうちに書いて、その言葉に人の中心にまで切り込む鋭さがあり、電光のように鮮かに事物を活躍させる言葉の才を持っていると批評せられている。この言葉の才が宗教改革をルーテルが思いもよらぬ方に発展させたのである。

それにはルーテル自身の責任も大なるものがある。叛乱の無効を諭した彼が農民の暴力沙汰を知るに及んで、「殺戮掠奪を事とする農民群を排す」という小冊子を公にして叛乱の輩をたたき倒し、絞め殺し、刺し殺すべきであると言い、君侯が虐殺を以て天国をかち得ること、他の人が祈りをもってするにもまさるような奇しき時代であるという暴言を発している。このような暴言によって激励せられ、政治的宗教戦争が起るようになったものである。このようにしてルーテルは本来平和の人であったにもかかわらず、政治運動がこれを奇貨として悪用し悲しむべく戦争を起すようになったのである。

ルーテルはあまりにも社会の表面に立ったのである。政治家はこれを利用し、悪用したのである。一面においては貴族に対して憤激し、他面においては農民や一般下層民に対して憤激している。ルーテルとしては前後矛盾しているのではなく、人間の本能性の激発に対して熱情を以てこれを否定したのであろうが、貴族も農民もこれを自分らの都合の良いように受取ったに相違ない。かくて天に栄え、地

に平和と呼ぶ宗教が、悲惨な宗教戦争を惹起すようになった。政治が宗教を悪用したことの結果であると言わねばならぬ。

これに比ぶれば親鸞は全くその態度がちがう。親鸞の生活態度は政治との交渉が殆んど無いと言っていい。もっともいわゆる承元の法難において越後に流されたのは政治との接触ということになるが、併しそれは政治的処分を受けたというだけであって、親鸞は極めてすなおにその処方を受け、かえって配流の結果をよろこぶという心境であり、暴言などを吐くということは全く無い。宗教的生活が非常に純粋である。越後に配流せられてからの心境はいわゆる愚禿の自覚であって、自分の心に深く沈潜するという生活である。政治との交渉などは全くない。

関東に移って後も群萌すなわち一般庶民の間に全く没入した生活である。その教は次第にひろまって行ったが、大勢の人々を集めて説教をしたのではない。五人七人というような少数の人々と辻堂などに集って互に心の問題を披瀝しあい、その間に親鸞の気持が人々の胸に染みこんで行ったのである。時の政治家との接触など全くない。平家が亡びて源氏の世の中となっても、更に政権が北条氏に移っても、親鸞は我れ関せずというような態度である。しかもその教は次第に深く民衆の心に染み込んでいる。実に親鸞は宗教家として生活態度を最も純粋に保った人である。

もっともこの親鸞にも激しい言葉が全く無いのではない前にも述べたと思うが、親鸞はその本来の性格には非常に鋭いところがあり、その点において敢てルーテルに譲らないものがある。それで教行信証の後序にある「主上臣下、法に背き、義に違し、忿(いかり)を成し、怨を結ぶ」という言葉は承元の法難について、主上をも臣下をも激しく責める言葉である。而して結局は「慶しきかな心を弘誓の仏地に樹て念を難思の法海に流す」ということになっているから、宗教的心境を決して逸脱していない。もちろん暴言を吐いているのではないのである。

関東二十年の生活の後に京都に帰ったということには色々の事情もあるが、関東の同行達から持ちあげられて、そこに政治的色彩のある宗教団体が出来ようとするのを避けたということもあると思われる。しかも決して国家社会のことを思わないでもない。朝家の御ため国民のために念仏するという心境がある。そこに政治を離れて国民を思うという純宗教家の真面目があるのである。

昭和三十三年五月二日

連続無窮

福田鉄雄

『教行信証』化身土巻に

「よろこばしきかな、心を弘誓の仏地に樹て、念を難思の法海にながす。ふかく如来の矜哀をしりて、まことに師教の恩厚をあおぐ。慶喜いよいよいたり、至孝いよいよおもし。これによりて真宗の詮を抄し、浄土の要をひろう。ただ仏恩のふかきことをおもうて、人倫のあざけりをはじず。もしこの書を見聞せんものは、信順を因とし、疑謗を縁として、信楽を願力にあらわし、妙果を安養にあらわさん。安楽集にいわく、真言をとりあつめて往益を助修せん。いかんとなれば、さきに生ぜんものは、のちをみちびき、のちに生ぜんものは、さきをとぶらい、連続無窮にして、ねがわくば休止せざらしめんと欲す。無辺の生死海をつくさんがためのゆえなり。已上

しかれば末代の道俗、あおいで信敬すべきなり。しるべし。華厳経の偈にいうがごとし。もし菩薩種々の行を修行するをみて、善不善の心をおこすことあれども、菩薩みな摂取す。已上」

以上は『教行信証』六巻のむすびの文章であります。親鸞聖人が道綽禪師の安楽集からご引用になった部分につき私は次のように考えます。ここのところは聖人のお考えは禪師のご文章と全く同一であったことと推察致します。そこでこの部分を親鸞聖人のお言葉として頂いてもよろしかろうと存じます。このご文章のうち、「さきに生ぜんものは、のちをみちびき、のちに生ぜんものは、さきをとぶらい、連続無窮にして、ねがわくば休止せざらしめんと欲す。」について考えますと「さきに生ぜんものは……連続無窮にして」は縦に即ち時間的に密接につながった、前の人の教を後の人が受けつぐ、善知識の相受ということでございましょう。又「無辺の生死海をつくさんがためのゆえなり」ということは、今現にこの世に生きとしいけるものすべてを救済するためであるという意でございましょう。即ち横に空

間的に限りなく心を感応しあい、意志を疎通しあい、互に理解しあうということと存じます。いずれに致しましても連続無窮という、「きわまりなくつながりあう」というすがたと申しますか、はたらきと申しますかによると思うのであります。

「連続無窮」の四字のうち、連続ということにつきまして、大変に俗っぽい、且つ例によりまして場ちがいな自分勝手なことを申してみます。連続とは申すまでもなくつながるということでございます。私どもが平素二つのものが画然と一線によって境界が明確にされると何の疑問もなく、自明と思っておる事柄でも、よく観察いたしますとそうはまいらぬことがあるように私には考えられます。

たとえば物質であるウラン二三五が分裂して、熱や光その他のエネルギーに変化するとき、どこまで物質でどこからエネルギーなのか。一線を画することが出来ないのではあるまいかと思います。いかに時刻をこまかくきざみましても人力では判然と物とエネルギーの境界を区別出来ないでしょう。即ち物とエネルギーは連続しているといえると思うのですがいかがなものでしょうか。ここのところは物理学者はどう理解しておられるか、うかがいたく思うのであります。ただ私素人考えでは物質であれエネルギーであれ、最終の存在と思われる対象はそれ自身一つで、しかも物質の性質とエネルギーの性質の二つを持っておって、この点で物質とエネルギーは連続していると説明するほかないと思っております。

次に時間と空間について考えてみます。この二つは互に次元も異り、相容れないものであるかの如く考えられますが、現実の世界即ち日常生活に於いては、時間をはなれた空間は考えられませんし、空間をはなれて時間は考えられません。時間と空間は連続しております。即ち一方がいつでも他方に組みこまれて考えられるのがこの実際の社会であります。一人の旅人に途上であったとします。旅人から「駅までどの位ありましょうか」ときかれた場合「サアゆっくり歩いても五分位です」と答えたとしますと空間の質問に対し時間で答えたことになりますが、質問者も回答者も何のこだわりもなく理解しあっております。又天文学の方では光年という時間の単位を天体間の距離即ち空間の単位としていることは周知のことであります。

生物と無生物との境界に立たされておる一つのものは、近頃一般の話題にものぼるウイールスであります。学者の説くところによりますと、ウイールスを生体の外にとりだしますと、結晶する一つの物質にすぎない無生物なそうであります。ところが之が一旦自分の繁殖に好都合な条件のととのつた生体に入りこむと、どんどん増殖してその宿主

を殺す程の恐るべき生物となるとのことであります。生物と無生物が一点ウイールスに於いて連続していると考えられるのであります。

患者の臨終に立ちあった医師は、脈をみて心臓の鼓動がとまれば「ご臨終です」と死を宣告致します。ところが更に手当を加えると蘇生することがあります。之は仮死の状態と申すのでしょう。又心臓がとまりましても他の体細胞が生きております。角膜などはその例であります。その他身体の一部の組織を適当な方法により培養して生活させることが出来るといいます。とにかく生と死の間に一線を画することも困難なことと思われます。どこかで生と死が連続しているのではあるまいか、即ち妄想をたくましくしますと、ある一つの存在の状態が条件のいかんによって生であり、又死であるということがあるかもしれぬ、と、自分でも訳のわからぬ結論に到達します。以上自然現象のうち「連続」ということの考えられる二三の例を挙げてみました。

次に心の問題について考えてみます。「独生独死独去独来」と申しまして、人間は孤独なものである。他をあてには出来ない、所謂世間が虚仮であると申します。それは全くその通りでございましょう。ただ私共に日常生活は他との密接な交渉連絡によって、営まれ、ささえられておりまして、よかれあしかれ人と人との心と心との連続即ちつながりがなかったら瞬時も生きておれないと思うのであります。互に憎しみあうというのもマイナスの心のつながりとでも申しましょうか、悲しいことにはこのことが人の世の中に存在するのも現実でございまして、それの最も大きく最もおそるべきものは戦争であります。人類の滅亡をも将来しかねないのであります。人の善意と善意とのつながり、今の世にこれ程大切なものが他にございましょうか。全世界の国々の僅か数人宛の指導者でよろしいのですが、互に相手の立場に立って物を考える余裕をもち、不信感を捨てて話し合つたなら、紛争の多くは戦争に訴えずとも解決出来るのではないでしょうか。国際連合という話しあいの場は、この目的実現のため設けられたのにちがいないのでありますが、理想に到達出来ないことはまこと遺憾なことであります。

日本の最高頭脳と自他ともに任じておられる知識人がかたらって七人委員会を結成され、世界に紛争発生の都度当事者へ平和への訴えを提起しておられることは素晴らしいことと思います。私は更に日本の心ある仏教者が多数集結して「平和委員会」とでもいう組織をつくって活動されることを念願するものであります。世の中には随分浪費と思われる金の使い方が目につきます。多少でも世界平和のために貢献するよう利用されたらと思います。世界の人が一

人でも多く平和の心につながるということは緊急に望ましいことであります。

私どもはよく善とか悪とか申します。そしてこの二つは全く正反対と思っております。実際その行動の方向は正反対であります。しかし自分について反省してみますと、善と悪は一つの支点によってささえられた心という一本のシーソーの両端のように思われます。もしも私の心の善の端がずっと上ったとしますと、他の悪の端が反対の方向に下ります。しかし心という一本のシーソーはつながっております。電子の波動性と粒子性が相補う関係即ち相補性であると、物理学でいうそうでありますが、之と相似た関係のように思います。私は心を一本のシーソーにたとえました。たとえにこだわるようでありますがシーソーはそれ自身独りでは動けません。心を波動にたとえますと、波は山あり谷ありで連続してどこまでも進んでやみません。即ち無窮であります。

親鸞聖人の御思想、ご信仰を案ずるに、積極面あり消極面あり、山あり谷ありどこまでも進んでとどまるところなかったように思われます。深い深い自己反省の上にたたれた高い高い御信仰であられたように拝します。

浄土和讃に

知慧の光明はかりなし

有量の諸相ことごとく

光曉かぶらぬものはなし

真実明に帰命せよ

と仰せられてありますが、愚禿悲歎述懐には

浄土真宗に帰すれども

真実の心はありがたし

虚仮不実のわが身にて

清浄の心もさらになし

とも仰せられてあります。

教行信証の総序には、

「……真実の教行証を敬信して、ことに如来の恩徳のふかきことをしんぬ。ここをもてきくところをよろこび、うるところを嘆ずるなり。」とありますが、信巻には

「まことにしんぬ、かなしきかな愚禿鸞、愛欲の広海に沈没し、名利の大山に迷惑して、定聚のかずにいることをよろこばず、真証の証にちかづくことをたのしまず。はずべしいたむべし。」と仰せられてあります。このようにちょっとみれば、反対のことをいわれておるようにみえるお語は至るところにございまして、以上はほんの数例にすぎません。

このことは人の心のはたらきのすがたをお示しになったと拝せられます。即ち心の二様のあり方を如来のおまこと

を世界を未完の書なりといへる研究者あり

をいただくというというところで連続させて、どこまでも深く深くご信心を味わって進むべきことをお示しになっておられることを拝察致します。教行信証を未完の書といわれる研究者があるそうであります。親鸞聖人がもっとながいきされたら、更に書きなおされたであろうということであります。自力の心をひるがえして他力をたのみたてまつるように一度廻心した念仏者は、聖人のお導きのとおり、御恩報謝のお念仏を称えつつ波動の如くすすむべきものとおもいます。以上「連続無窮」ということにつき大変こじつけたようなことを申し上げました。

ところで歎異抄第二章に

「各々十余箇国のさかいをこえて、身命をかえりみずして、たずねきたらしめたまう御こころざし、ひとえに往生極楽のみちをといきかんがためなり。云々」とあります。親鸞聖人が関東にご滞在中に厖大な数の念仏の信者が出来たことでありましょう。このうちの何人かが真心を領解致したく存じ、はるばる京都へのぼり、聖人におあいになったのでありますが、これは同じお念仏の信仰を領解したいという、信心の連続を念願するあらわれでございましょう。つまり空間的な、横のつながりあいという自然の要求が出てきたことでありましょう。この人々の一人に唯円房がおられたことと存じます。

又同じく第二章に

「弥陀の本願まことにおわしまさば、釈尊の説教、虚言なるべからず、仏説まことにおわしまさば、善導の御釈虚言したまうべからず。善導の御釈まことならば、法然のおおせそらごとならんや、法然のおおせまことならば親鸞がもうすむね、またもてむなしかるべからずそうろう歟。云々」と申されてあります。ここのところは縦の即ち時間的の連続無窮のすがたをあらわしておることと思います。即ち善知識の相承であります。唯円房が関東に生まれ、親鸞聖人に出合いお念仏の信仰に入ったのでありますが、つまり横の連続の面と縦の連続の線との交点の一つに立在していて、その位置は決定的なもので、摂取不捨の御利益の中に生きておられた訳でございましょう。このような御縁で唯円房としては親鸞聖人の仰せを信じ、お念仏の真信に入らざるをえなかったと思うのであります。

このことを私自身の身にひきあててかんがえてみますと、「……親鸞がもうすむね、またもてむなしかるべからずそうろう歟。」と聖人が仰せられてから、時間的に歴史的に多数の善知識の相承がございまして、明治に至り近角先生にまで連続し、大正年間に先生の仰せを承りて、如来様のおまことを頂く御縁にめぐまれたのであります。現在はまた福島政雄先生、白井成允先生、花田正夫先生を初め、数知れぬ多数の先生方、法兄の方々にとりまかれお導きを頂いております。のがれようとしてものがれることが出来ず、摂取不捨のご利益にあずかっておりまして、お念仏をとなえずにはおれないのであります。このことは私にかぎりませず、どなた様もお念仏の信心に入っておられる方にあってはおなじと思います。

かくしてお念仏は、「連続無窮にして、ねがわくは休止せざらしめんと欲す。無辺の生死海をつくさんがためのゆえなり。」のお語のとおり永遠につづくことでございましょう。教行信証を拝読致しましても、ご和讃を拝見致しましても、親鸞聖人の御一生は、弥陀のご本願、釈尊の御説教、七高僧を初め多数の善知識の御導きをお示しになるのに懸命であられ、又信者に対しては懇切丁寧に信心をおすすめになり縦横無尽身を粉にしての仏恩報謝に終始され、尊い極みでありました。

以上大変あじけなき、理屈つぽいようなことを申しました。ともあれ私の只今の心境は歎異抄第二章の「親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしとよきひとのおおせこうむりて、信ずるほかに別の子細なきなり云々」の御語につきるのであります。

合掌、　南無阿弥陀仏　　南無阿弥陀仏

（四〇、九、一一）

その心が助けらるる

源通寺

後生大事々々と口ではいえど、何かむこうに飾って置くような事になって居らぬかと、自分の心を叱りつけて見ても、その下からまた種々のことに動かさるるが凡夫の悲しさじや。

美濃の某が、洪水に流されて今溺れ死なんとした時に、一本の松の木にたどりついて漸く命を取り留めその上で一心にお念仏申して居た。その時思うようは「此度もし此命が助かったら、これからは一心に法を求めたい、どこまでもお念仏が致したい」と思うて居たが、翌朝になって、水が皆退いて見ると、まるで夢見たようにそれ程心が思うてもくれず、却って以前よりは邪見になったというて居た。

そこが偽りのない処で、下心には誰でも堕ちてもだいじない、助けられいでもよいという奴が居るのじや。そこを忘れぬ様にしたい。

しかしその心が今助けられるのじや。

随想その折々

柳瀬留治

須く動物性を蟬脱すべきです

最近、数学の世界的権威者、岡潔博士の春宵十話を読んだ。戦後のわが若い人々が急に動物的発達の情勢にあるのを嘆き且つ悲しみ、心ある教育者、為政者の反省を促していられる。民族百年を憂うる深慮から迸るその熱誠に同感を禁じ得ない私です。特に最近女性の初潮が三年も早まり顔の変化が驚くばかり動物的になりつつあるといわれ、わが民族特有の精神面が置きざりをくって動物的に体が発達しつつあると言われる。私の云う生物的人生観を形成しつつあることの証言とも思われるのです。

それについて思うことは最近人々が実存主義的になり、己に存在するもののすべて、醜いものも、悪いものも、存在するが故に事実であり、肯定し主張すべきだという傾向が強いようです。

それで正しい生活、意義のある人生を求め、正しからざる己に不満をもつといった人はすくなく、従って己を見つめ、内省し煩悶などする人を劣者視し、ノイローゼだと冷視し、それは神経医によって治療すべきものとしている。反省や内省は弱虫のすることだ。各々の個性は尊重すべきもので、肯定して進むべきだとの傾向です。教育の方でも医家の方でもそした行方を妥当だとしているようです。

生活の煩雑からノイローゼを起したり、甚しきは分裂症的などになると、それに対して電気療法を施し電撃のショックで意識上、意識下に沈澱しているもや〳〵憂鬱を払拭させるのです。それで症の軽重をいうに何ボルトの患者と称するようです。

正しく生きようとして己れを攻め煩悶の結果、神経症状を呈している人までを、同様な神経症患者として取扱われている今日です。そして正しく生きようと己を苦しめることは精神衛生上やめるよう仕向けているようです。現代っ子の生き方というのは、神経を太くし、己を省みたり人に気がねをするなどをせず、図太く、己を肯定し、生を肯定して行くのだとされている。車中でもそした生き方を説いた書物を読んでいる人を見うけます。一般的に体力的ファイトを以て図太く生きたいとねがうようです。運動競技などもそれですが、技術の面で反省の伴うものもあるでしょう。

ノイローゼの多くなるのは、世は人為化し、生活関係が面倒になるためで、それは人間だけかと思うと、野山の自然に生きている動物までがです。文化が自然を征服し、深山に道路工事が始まり、ハッパの轟、車の轟、人声と、自然の静寂が破られ、彼等がおびやかされ、生殖所が安心して生活が営まれなくなり、絶滅を辿るのです。動物実験によって彼等の神経症や疲労など実証していることです。

人間は単に外的刺戟に反応し適応しようとするに止まるものではなく、内的に正義感を持ち正しく生きようとの高度な内省から、己に疑問をもち、己を否定して苦しむ。これは脱皮の苦しみで尊いものです。否定の上に立つ肯定こそ真の肯定です。禅家でも「大死一番絶後に蘇る」といい、浄土門でも「前念に命終し、後念に即生す」といいます。現実そのままの肯定は動物的だというべきです。

昭和四〇、七、一日。（草原誌）

大道無門

大道とは人間達成の道で、心ある者の辿るべき道であり、門は家屋の外囲に附した出入口で、出入りを制限するためのものです。この一句、大道には入出を制限するような門などがあるべきでないとの意味です。

門には威厳や飾の心持もあろうが、官衛（かんが）、学校、邸宅などでは出入を制限する意が多分にある。古い城廓などでは防備上のもので、中国など古く城を中心に民家を廓壁を以て囲み、城門を設け、賊の浸入に備えていたことです。

平和な日本の庶民は厳めしい門などを余り好まぬ風があったが、物騒な今日は玄関を閉している。玄関も等しく門関の訳です。

師を求め、教を乞うことを入門するという。又入学するのを校門をくぐるという。一定の資格がないと許されない訳です。又僧になることを仏門に入るといい、各宗を宗門という。芸道も入門といい、短歌では白秋門下、空穂門下などいう。こうした人間達成の大道に門関を設けて入出の自由を制限するような意で使われるのはおかしいことだと思う。芸術でも宗教でも門を設けて条件を附して出入を制限すると、中が窮屈になり萎縮沈滞して、自由清新さを欠いてくる。中味の実質さえ偉大であり、深遠であれば心ある者は入らざるを得ぬ筈です。又心なき者の去るのもよい。覚める時があれば再び入り来る筈です。

わが近角常観先生も門を排して信を説かれた一生でした。「大道無門」の句は中国の宋の時代、無門慧開禅師が禅の公案を集めた「無門関」の扉にある句で

『大道無門、千差の路有り。此の関を透得せば乾坤独歩・ならん』

とあるものです。要は「関を透得する」ことです。ここでは禅の無学を透得するのです。すると乾坤、すなわち天地を自由自在に濶歩出来る己となるの意です。

更に云えば相対の人間生活では、利だの害だの、善だの悪だのにこだわる。その相対の門関を排した「無」にめざめると自在に大道を独歩出来るというのです。

これを作歌の道に移していうと、我々は利害だ、面子だ義理だといった、ごた〳〵したものに煩わされて濁り、澄んだ詩が生れないのです。心の鏡に世の埃が積って、澄んだ影が映らないのです。それを払拭して「無」になれば、埃のこだわりがなく、有のままに来るものは影を投ずるわけです。

感を統一するとか、心を澄ますとか、単純化するとか、いわれる。そして作歌の態度の大本を大道の上から大道無門と云っているものと解されるのです。道は一なりと云い達すれば何れも一に合すると云われる。何もよい歌を作るためなぞでなく、達した心の基盤を得ることがお互の根本でありそれが得られると世にこだわりなく至極自在に屈托なく生きられる。その大道を歩む、これにました幸福はないのではあるまいか。

昭和四〇、八、一日。（草原誌）

日々是好日ということ

大自然、然も宇宙の運行そのものには暦日などないであろう。我々の世界にそれがあるので、事のけじめが付き、さっぱりした気持になり、芽出度く新年を迎え得るのです。

元々草木が芽ばえ、花の咲く季を春とし、その春の始めを年の始めとしたことが知られるのです。旧年の煤を払い一つのしめくくりをつけ、年を迎えるということは、生活上意義があり、嬉しいことです。

然し来ったその日を本当に嬉しみ楽しむということ、これはその人自身が達していないと出来ないことで、多くの人々は新年だからと、旧年のくさぐさを作為的に払いのけ清らかな明るい心に迎えるのだとし、殊更に晴れやかにしているようです。

新年に限らず「日々是好日」の語がよく言われることです。これにつきいささか思いを述べたいと思うのです。

この語は碧厳録の第六則に掲げられた雲門（韶州雲門山の文偃禅師。その流れを雲門宗と呼ぶ。）の垂語です。彼の垂語を雲門四世を嗣いだ僧雪竇（せつちょう）が編み、

頌古、即ち詩を以って奥意を示したのです。

元雲門は道を求めて僧睦州の門を叩いた。刻下に言を求め吐かないため彼を門外に押出した。更に訪い来って門を叩き、三度目には片脚を門内に入れ押出されまいとした。睦州は「さあ道え、さあ道え」刻下に言を求め門を閉めようとする。雲門は戸に脛を挟まれ痛さに堪えず、進退窮した刹那、道を悟った。恐らく彼が今迄の願いは、道を得て心の闇が晴れ、一大転換して明るくなろうとし、大悟を得て仏性を得んがためであったろう。将来に光を求めてのことだったろう。ところが刻下闇に迷っている己、行先も同様な一箇の己だ。それ以外に仏はない、と悟ったのであろう。それが判った彼は、闇即ち光であり、日々好日、将来に光を求めるでない。刻下の日々是れ光だと垂示したものと解される。

わが近角常観先生もそれに似たことを常に言われた。

「君は今、人生全く仕様がなく、自分の心が浅ましく、くら闇で困っているではないか。今現在光のない君である。仏がわかったら、信が開けたらなど将来へのみ逃げている。現在の君、それだけが君の余体なんだ。将来へ将来へと幻を追っかけて逃げる君、それを迷いというのだ。それで曠劫より流転し、このさき未来際に流転するのだ」

と現在刻下の己の一点に釘を刺されるのでした。睦州が門扉の間、雲門の進退を押えたそれと、常観先生が現在の己の一点を押えての言とが、共に相通う偉大な垂示だと思うのです。

豊かなお正月、貧しい正月、何れにしても、日々是好日底の心であったら、僅かの屠蘇でも嬉しく手放しで楽しめるのではないでしょうか。

元日や何は無くても　親二人　〈一茶〉

梁塵祕抄

不軽大士のかまえには逃るる人こそ無かりけれ　誹る縁をも縁として遂には仏になしたまう

不軽大士ぞあわれなる　我深敬汝等と唱えつつ　打ち罵り悪しき人も皆　救いて羅漢となしければ

仏性真如は月清し　煩悩雲とぞ隔てたる　仏性遥かにたとみてぞ　礼拝久しく行いし

愚者の信

花田正夫

〔一〕

仏弟子伝を読みますと、智恵のすぐれた舎利仏、徳光のかがやく目連、雄弁のほまれ高い富楼那、等々、白色白光青色青光・赤色赤色の荘厳さに目のくらむのを覚えます。

その中でことに私の心をあたためて下さるのは愚者、般特であります。兄に導かれて仏弟子の仲間入りをいたしましたが、一句の偈文も暗誦出来ず、人々の嘲笑のまとになりました。

とう〳〵兄も断念して「お前は仏法の器でない」と捨てたのであります。般特は祇園精舎の門前に出されたものの世渡りの道も知らず、自分の愚鈍さを省みては再び兄にたのみもならず「どうしようぞいの、どうしようぞいの」と空しく悲泣するばかりでありました。

時しも静坐していられた釈尊がそのことをお知りになると歩を門前に進められました。般特は誰か人の近づく気配に驚いて見れば、そこに釈尊が慈眼をもってお立ちになっていられるので思わず居ずまいを正し合掌しますと、

「般特よ、決して歎くことはいらない。兄にすてられたようであるが、仏法は汝の兄が作ったものではない。仏が長い間、ことごとく萬行を修して成就したものである。汝は仏辺にあって求めようとしないか」

と、兄に捨てられた般特に、仏法は仏の教である、まず仏意に従えと勧められるのであります。このことは非常に大切なことであります。私共の聞法の道において、仏以外の声に迷わされ易い、大事なことは仏の本願をそのままにきくことであります。

讃岐の庄松同行の逸話に

「或時、勝光寺の奥さんが、御法義について、仏照寺と得雄寺とに自分の領解を調べて貰うと、仏照寺はよろしいとほめ、得雄寺はわるいとおとしました。奥さんが深く心配している時、庄松同行は諭して『仏照寺様も、得雄寺様もお浄土は持ってござらぬ。その持ってござらぬ

人の言うことに迷わずと、お浄土を持ってござる仏の仰せにしたがうより外に手はない〳〵』と」

まことに仏意にかなった庄松同行の領解であります。

さて般特はこの釈尊の直々の仰せを蒙りましたけれど、

「私はいたって愚鈍の身でありまして、とても学ぶ力もありません」

と、御辞退申すのであります。その時、釈尊は、

「愚者が自らを愚と知ることは正しい智恵である。愚者のくせに自ら智者と思うているのが真の愚者である」

と答えられました。この一語は般特の心を異様にゆり動かし、方向を一転したのであります。

一休禅師と蓮如上人の逸話として巷間に伝えられますものに、禅師が或日京都の街で曲りくねった松の枝を掲げて、「この枝をまつすぐに見た者に賞品を与える」と張り紙をしました。その時沢山の人々が集って、どちらから見たらまっすぐに見えるだろうかと色々思案しましたが、どちらから見ても曲っている。そこを通りかかった蓮如上人が「曲った枝だと云え」と教えられました。すると皆の衆は「そんなことは三才児も知っております」と云うと「曲ったものを曲ったと見るのがまっすぐに見たのだ」と教えられたそうであります。

おのが愚鈍さをもてあまして居りました般特のよろこびは如何ばかりでありましょうか。愚鈍な身を利智な者にしなければならぬと、駄馬にむち打って来ましたものの、遂に兄からも見離されて断念の外ない身に、釈尊の直々の教誨によって、そういうことが仏法ではなく、愚者が愚者と知るところに正しい道があると知らされたのです。八方塞がりの身に、一縷の光明がさして来たのです。

やがて釈尊は、一本の箒木をお渡したなって、これをもって精舎の内外を掃除しながら

「塵を拂い、垢を除かん」

と繰り返し〳〵誦えよと教えられました。このことを続けて居りますうちに、機縁が熟しまして、

塵垢とは煩悩であり、払除とは智慧である。愚鈍の塵にまみれた身を悲憫される光が仏の智慧で、現に我身はその光明を蒙っている、と、段々に心がひらけて、ただちに仏前に詣でて、その洪恩を謝しまつったのであります。釈尊もまたこれを非常におよろこびになって、時に鉢を持たせて随えられました。

然し仏教以外の人々は、釈尊の教も浅薄なものである、あの愚者でさえさとれるのだからと仏法をそしる材料にしお弟子方や信者の人々さえも仲々信用しないでさげすみ疑うという有様でありました。

「如来は智愚の毒を減す」と云われますが、智者のもつ

慢心の毒、愚者のもつ卑屈の毒、そうした毒を消滅されます。今や般特の持てあました愚者の毒が洗除されて、人々の謗りにさまたげられず、そしられるにつけても愈々仏願の広大さを仰いで行きますにつけて、そしりの声はやがて驚きと讃歎の声に転じ、その名は二千五百年の今日、経典に列して私共に大きな灯火を掲げて下さつて居ります。

〔二〕

次に忘れ得ない人は、法然上人のお弟子随蓮房のことであります。上人の御晩年に吉水の禅房につかえ、御流罪の時は四国までもお供してまいりましたが、上人は御臨終近くなられて「念仏はようなきをようとす、ただひらに称名の行を専らにすべし」と教えられました。

上人の御往生の後はいよ〳〵余念なく念仏申して居りましたが、三年を経まして建保二年の頃に

「どんなに念仏申しても学問もせず、至誠心、深心、廻向発願心の三心さえ知らぬものは往生出来ないぞ」

と、他のお弟子方から責められました時、随蓮は

「故上人は、念仏は義なきを義とす、ようなきをようとす。ただひらに仏語を信じて念仏すれば必ず往生すなりと教えられて、三心のことはちっとも仰せられませんでした」

と答えると、

「それは何一つ心得のない、無智の者のために、方便して仰せられたので、上人の御著書にかよう〳〵、経釈にもかよう〳〵あるぞ……」

といかめしく責め立てましたので、随蓮もそうしたこともあるかも知れないと、疑いはじめました。そして誰人に尋ねたらよかろうかと、とつおいつしておりますうちに一二ケ月の間それが心配で〳〵念仏も申さずに過ごしました。

或夜の夢に、京都の法勝寺の西門から入ると、池中に様々の蓮花が咲き乱れて非常に美事でありました。お堂では沢山の僧侶を前に法然上人が法話をしていられましたが、随蓮を御覧になるなり近くに呼びよせられ、まだ何も申し上げないのに、「お前は心配ごとがあるようだが決して歎くことはない。事情を云って見よ」と仰せられたので、どうして御存じになったかと驚きながら、一切のことを打ち明けますと、上人は、池の花を指されて

「あの花は何の花か」

とたずねられました。随蓮は妙なことをと思いながら

「蓮花でございます」

とお答えすると、

「しかとそうなのか、若し桜だ梅だという人があっても間違いはないか」

と重ねて仰せられますので

「現に蓮花でありますから、たとえ人々が何と申しましてもそれは信じられません」

と申し上げると

「念仏のこともまたその通りである。ただひらに仏語を信じて念仏申せば必ず往生することは、蓮花を蓮花というが如し。深く信じてあれこれとはからうな。悪義、邪見の梅、桜を信じてはならない」

と上人が仰せられたところで、フト夢がさめました。それからはすっかり疑雲が晴れて、ふたごころなく念仏して、八十歳まで天寿を完うして往生の素懐をとげました。

〔結〕

灯火をいくら増しても太陽の明るさに加えることは出来ません。またどんなに薄暗い油灯の部屋も太陽が輝くと明るくなりますように、如何なる智恵者も仏智に加えることは出来ず、また如何なる愚者も仏智をさまたげることも出来ません。智者の持つ驕慢の毒を雪、愚者の持つ卑屈の毒を氷とすれば、太陽はその雪も氷もとろかしてしまうように、仏智の不思議にたすけられるのであります。

「般特よ、悲しむのをやめよ」

と釈尊は仰せられ

「随蓮よ、心配しなくてもよい」

と法然上人は告げて下さいます。

大正の末でありますが、当時仏教済世軍をおこして街頭で仏法を鼓吹されました真田増丸師が、広島の寺で

「馬鹿じゃ、馬廉じゃと馬廉にもするな、
　　糞もこやしになるわいな

という唄があるが、都会の人達がもてあます糞尿も、一度お百姓の手に渡ると立派な肥料となるように、如何におろか者も、仏様のお導きを蒙ると尊い味わいが得られるものだ云々」

と説かれたことがありました。その寺へ一人の中年の婦人が参詣していましたが、講話がすむなり先生のお座敷へ飛びこんで来て、

「先生、只今は有難うございました。私は生れつき頭がわるく、学校の成績も劣等でございましたが、縁があって今では嫁ぎまして子供もありますが、のろまよ、足らずよ、と親戚や人様からあざけられて参りました。自分でも本当に愚鈍さを悲しんで居りますが、今日の先生のお話で暗い胸にあかるいひかりがさして来ました。お念仏を忘れずに、仏様のお導きを頂いてまいります……」

と目を輝かして喜ばれたということであります。

無明長夜の灯炬なり　智眼くらしとかなしむな
仏智無辺にましませば　散乱放逸もすてられず

あとがき

秋もたけなわになりました。この秋、池山栄吉先生のドイツ話の歎異抄が東京の理想社から出版されました。理想社の佐々木氏は、こうした貴重な書は後世にのこす義務がありますといわれて発行のはこびになりました由です。

東京都新宿区赤城下町四六　理想社
振替、東京、七八三〇三番、定価三百五十円であります。今秋の一道会を飾る一つの出来事でありました。

一道会御案内

京都市右京区山田開町、浄住寺。バス苔寺終点下車。新京阪、桂乗換え、上桂下車。
十月三十一日午后一時、一道会開催。

「一道会」とは、池山先生の御晩年に、蓮華谷の先生のお宅に月々集つて、一人々々が口を開き、最后に先生が何か感話をして下さつたのであります。一道とは、無碍の一道であり、唯仏一道独清閑の一道でありました。

さて先生が昭和十三年に亡くなられまして、御仏壇と御遺骨を浄住寺様でお安置下さることになりまして、年一回、御忌日に近い日曜日に、誰れ言うとなく自然に集つて、先生のお霊前で、お慈育を謝し、且つは身近かに味わいますことどもを語り合つて居りました。時には先生のお好きだつたレコードを聞いてあたためて頂きました。

昨秋は皆様のお念力によつて名号碑を建立され、お集りの人敷も段々と増加し、一人々々に話つて頂くには時間がありませぬために、極く僅かの御縁の深い方々の御述懐を互に聞き、且つ語ろう会となりました。然し世の常の会と異りますことは、飽くまでも如来聖人の御前に、先生を先達として自分自身の歩みを打ち明けて、お聞き頂くという点であります。

○

近角先生の歎異抄の御講話はこれで終らせて頂きます。このあとは、近角真観様の御手で「歎異抄愚註」がいずれ出版せられますことと信じますのでそれをお待ち下さいますように。

「連読無窮」の福田先生のお原稿は、御重病のまま、御苦痛のすこし去られました時に筆を執つて下さつたものであります。

嗚呼先生は九月のお彼岸中に皆様に笑顔でわかれをつげられて念仏の息がたえられました。つつしんでお悔み申上げます。

御案内

※毎月第一、二、三日曜、午后一時半、一道会例会。
市電、新郊通り一丁目下車、東一丁半入ル。

※毎月二十四日、午前、午后。昭和区小桜町、教西寺法話会。
市電、御器所通り下車。桜花学園東側。

× × ×

慈光第十七巻第九号　昭和四十年十月十五日発行（毎月一回十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可

定価　半年　二百円（送共）
　　一年　四百円（送共）
名古屋市南区駅上町二ノ八八
編集・発行人　花田正夫
愛知県西加茂郡三好町大字福谷
印刷人　本田政雄
名古屋市南区駅上町二ノ八八
発行所　慈光社
振替口座名古屋一〇四七〇番